

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	子どもの語るあの世 : 「あの橋をわたって」(作文)の分析から
Author(s)	中川, 節子
Citation	児童の言語生態研究 , 16 : 49 - 58
Issue Date	2004-02-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045191
Right	
Relation	



子ども の語るあの世

——「あの橋をわたって」(作文)の分析から——

中川 節子

子どもの境界領域をさぐるために、

さらに言うなら、子どもたちの「あの世」を見るために、この題名を設定してみた。橋は人間にとって、あの世とこの世の橋わたしであると考えたからである。「あの橋をわたって」という題名から、どんなふうイマジネーションが動き、あの世の世界を子どもがどうかいま見ているか見るためである。

平成十四年八月、私たちは、岩手県の内野小学校に於いて、「善太と三平」注1)という教材を使い、神秘的場所を見つけ、それを語るというテーマで授業を行った。

詳細は、本誌授業記録に託すこととするが、その時の子どもたちは、まさに、自らの神秘の場所をひそひそ話で語り始めたのである。こんなことを言っていないのではないかという気持ちと、もったいなくて語れないと

いう雰囲気であった。

子どもたちの中に確かに神が住んでいたと考えられる。そして、その子どもたちが感じていたその雰囲気、異世界であったにちがいない。研究協議会で、問題となったのは、ここ内野の子どもたちは、「善太と三平」の中に出てくると全く同じような神秘的な場所があるから、異界へ行けるが、都会の子どもたちは果たしてどうだろうかということだった。私は、今回「あの橋をわたって」の作文で子どもたちの異界を見ようと思っているのだが、この作文を見る限り、都会の子どもたちも、十分に、異界に行き、遊ぶことが出来ていると確信した。

「あの橋をわたって」という題名だけでなく、異界へすんなりと入ってしまったのである。

本会主宰であった故上原輝男氏が、

イマジネーションの定義のところ

「イマジネーションの兇言態流の捉え方を明確にしておかなければならない。それは『この世とあの世のつながりそのもの』ではなく『この世の人間が、なぜあの世を語るのか?』『あの世ということに反発するタイプの人間はどうして反発したくなるのか』という動きを問題にしているんです」と言っている。

これはあの世を語るということが、つまりはイマジネーションの発動そのものだからではないかと考える。

そして、反発はそのイマジネーション自体が動いてしまうことへの反発なのではないか。

私も小学生のころ姉と人が死んだらどうなるかということについて語ったことがあった。姉は、どうなるのだろうとさかんに不思議がり、いろいろな事をいっていたが、私は、それこそ、後者

の反発人間で「死んでみなくちゃわからない」とそこで湧いてくるイマジネーションを制した覚えがある。姉はそれでは答えになっていないと怒っていたことがいまだに脳裏をよぎる。ひっかかっているのである。人間に生死がある限りあの世の問題はずっとついているものだと考える。

子どもの語るあの世が果たしてどのように子どもたちの神性と野性にからんでくるかを見て取りたいと考えている。

どの学年も、子どもたちは喜々として作文を書いており、特に、低学年は枚数も多く、そしてたのしげであった。との報告を受けている。

以下、低・中・高にわけその特徴をのべていきたいと考えている。

1 無心の発動性(低 一・二年生)

— イマジネーションの発動性

(1) あこがれ↓願ひ

(2) この世からあの世へ

●あの世からこの世へ

2 意識世界の見え隠れ(中 三・四年生)

— イマジネーションの停滞・

偏向性

(1) 夢か現実か

(2) あの世の世界とこの世の世界の命名

命名

3 世界定め(高 五・六年生) — イマジネーションの時間空間をこえて

無限ということ

(1) 無制限ということ

(2) トランスフォーメーションによるあの世とこの世の自覚

(3) 神性と野性をよびおこすイマジネーションの世界

無心の発動性(低 一・二年生)

イマジネーションの発動性

(1) あこがれ↓願ひ

① (一年男 聖徳)

あのはしをわたってゆめのくにへいくんだ。ゆめのくにからは、にじのくにへいくんだ。にじの国からは、くもの国へいくんだ。それでくもからくもへうつって、くものこうえんへいくんだ。それから、あそんでかえりに、にじの国へもどって、にじのくにホテルでごはんをたべて、あさ、ゆめのくにへいって、ゆめのくにホテルであさごはん。それから あのはしでかえるんだ。よしよといのきまりだ。と ぼくは思った

とたん、きりがぼくをおそった。めをあけると、うちだった。さつきはゆめのなかだった。いまはなつやすみ ぼくはゆめをみていた。

② (一年女 聖徳)

略

ゆめのなかではわたれるかもしれない。でもひとりじゃこわいから、友だちと一しよにわたってたのしい思い出を作ろう。そのことは、いつか かみさまにおねがいしてかなえてもらったなら、友だちと一しよにわたりたいな。そのときは、うちゅうでもとどくとくべつなはしを作ってもらおうよ。だって、そうしてもらったら きつと、きれいな

はしもみえるし、月の上にのれるかもしれないから。だから、神さまに手がみをかきたいと思った。

かみさま、ぜったいかなえてください。

い。

①、②とも、うきうきと躍動感があり、はしのむこうは、もう別世界、それを宇宙空間の中に位置づけ、とびまわりたいと願っている。

③ (二年女 玉川)

ある日、橋かけ山に新しいはしをかきました。七才の女の子ハッキーが、「その橋をわたりたい」と思いました。その橋をわたると楽しい事や、おもしろい事や、自分が、こうなってほしい、ああなってほしいというと、本当に、そのねがいをかなえてくれるのです。(略)

⑤ (二年女 学習院)

みどりにかこまれているはしを女の子がわたっています。でも、風でゆれて少しこわいところもあります。でもこのはしは、つりばしではありません。はしの下は、きらきらとひかる川、女の子はそんなものを見たことがあります。むこうのきしにとうとうつきました。そこを見ると、とてもきれいなお花畑があつて、いろいろな花があつて女の子はそが気に入ったようなので、花をつんでかえりました。

(2) ●この世からあの世へ

④ (二年女 玉川)

はしをわたったら大きなまちがあつて、そのまちに、いっけんのホテルがあつて、そのホテルにとまった人がいて、その人はそのホテルが気に入って、そして、その人はそのホテルになんかおもとまって、かえっていききました。ある日、そのホテルに、たま子といううせいと、きりこといううせいがかきて、ホテルをおしろにかえて、そこに小さなきれいなへやを作って、そこに、ふたりですんで、くらしして、その小さなへやの半分をまほうで、すごく広いおにわを作つて、その半分にお花畑を作つて、チューリップ、バラ、あさがお、それに世界にひとつしかない十しゆるいの花のたねを百こうえて (略)

④、⑤は橋をわたって異界へ行っていると考えて良いだろう。④は、はじめ

はホテルだったそのホテルに妖精を登場させている。その妖精たちに花畑を作らせ、話ほどまるところなく続く。

⑤はきらきらした川の上のはしを、風の中を走る少女のようにわたっていく。そしてお花畑に到着するのである。

この二つともあの世の花園で、たのしくあそんでいる様子がわかる。この世々あの世である。しかし、次のものは、同じような浮遊した感覚なのだが、はじめから浮遊感覚なのである。

●あの世からこの世へ

⑥ (二年男 学習院)

ぼくはくもの上にいました。ある日とつぜん、前にはしがみえました。すると、はしがとつぜんなくなっていくのです。たいへんです。このはしをわたらないと、ふるさとへはかえれません。するとまた、はしが、見えてくるのです。それをわたろうとした時、こうずいがきたのです。ぼくはながされてしまいました。

⑥は、あの世から、この世へ来たものと思われる。くもの上で浮遊していた魂が、こちらへわたつて来る。途中、はしは消え、びつくり。それで、ふるさとつまり自分が生まれようとしていると

こへ行けない。ということだろう。しかし、こう水で流され、ぼくはめでたく誕生。次の作文も、やはりあの世々この世へ来たものと考ええる。

⑦ (二年女 学習院)

さいしょ女の子がいました。でも、その女の子のいへは、くもでした。その家には住んでいる女の子もだれもわたつたことのないはしがありました。ある日、その女の子がそのはしをわたたりたくなっていつてみたら、色にじ色で、ふわふわしています。そうしてわたつてみたら、へんな動物がいました。

そうして、そのへんなどうぶつにどこかへつれていかれました。そこは、そのへんな動物がたくさんいるところでした。その女の子は、そのへんなどうぶつがいるところへすすんでしまいました。

⑦は、うがった言い方をすると、へんな動物は人間なのかもしれない。と考える。この世々あの世へ、あの世々この世へと、一二年生は、いつたり来たりできるのである。

そして、生まれたり、他の異界のものとも交わつても平気。そして、何よりとても、たのしそうです。あ、あの橋をわたつて「これがこれほど、あの世々この世を書かせることになるとは思わなかった。イマジネーションが無心に発動して

いるということがよわかる例があつた。つあるのであげたい。これは、あの世々この世とかいうことではなく、この題名がこのようなイマジネーションを発動させたのだと考ええる。

⑧ (二年男 聖徳)

これまさ橋を渡つて行くと、何があるのかな。ぼくは、こう思った。橋のむこうには町があつて、ゆうえんちとかがあつて、すぐたのしいと思つた。ぼくは考えた。思つたことが、本当なのか。ぼくは本当だと思つた。そして、橋をわたつてゆうえんちにあそびに行くと、

⑧はイマジネーションで動かされている思いが、確かなことなのだ。ということ、確信している。イマジネーションが子どもの行動をリードしている例といえる。

⑨ (二年男 聖徳)

ぼくはむかし、どんなものになつていたんだろう。人かもしれないし、木かもしれないかな。と考えていると、おととに、あそぼうよ。とムードがこわされる。でもまた考えると、「おかしの家があるのかな。」と考えます。そして、ねむつてゆめをみた。おかしのいえへ入つたら、うさぎとネズミとトカゲが

いた。そして、アイスを食べていた。ぼくは、よだれが、たれました。「おいしそう。」といいました。それでおかあさんにおこされたと思つたら、考えていました。そうしたら、いつものところにいました。またまた、考えました。そして、またへんなところにきました。そうしたら、穴の中におちたところをそうぞうしました。またそうぞうして、あばよ、といいました。そして、そうぞうをやめました。

⑨についてはあの橋をわたつた向うは、想像の世界であつたのではない。自分が想像をしている道筋を、弟やお母さんが入りながらもどんどん追つていく様子が、よくわかる。橋に誘発された無心のイマジネーションの発動と考えて良いのではないか。

「あの橋を渡つて」という題名から、すぐ、ゆめの世界とことわり、異界に入り込む子どもが多い。二年生でも2名、書き出しに、

ぼくは、こんなゆめをみました。

(二年男 学習院)

私は、こんなゆめを見ました。

(二年女 学習院)

と書いている子がいた。そして、橋をわたつて異界へ行く。その他の子どもた

ちも、ゆめが多く出てくる。「……と
思ったら、ゆめでした。」と書きつけ、こ
の世の中の異界をゆめの世界へと誘っ
てしまう。あの橋のむこうの異次元も、
ゆめも、全くイマジネーションの活動
としては同じなのだと改めて思う。

既に、研究会誌十四号にゆめの構造
意識と題して、夢作文の分析がある。
(注2)その中で境界領域をあげて述べ

意識世界の見え隠れ(中三・四年生)

2 イマジネーションの停滞と偏向性

(1) 夢か現実か

低学年では、無心の発動性が、中心
で、あこがれ、願い、そしてあの世とこ
の世とが、渾然一体となつて行き来を
し、それが、イマジネーションの力につ
き動かされていることがよくわかった。

中学年になると、このあこがれや、願
い、異界のたのしさが、残つてはいるも
のの次第にしぼんでいくのである。中
学年での特徴は、自分の動くイマジ
ネーションにストップをかけはじめて
いるのである。本会主宰者が、夢作文の
分析の論文(注3)で、指摘した意識の
分子分母の転換が生じているからであ

ているが、本稿は、それをさらに、境界
領域に限定してみた。子どもたちの境
界領域としてのあの世を見たかったか
らである。しかし、正直いってこれ程ま
で、ゆめが登場してくるとは思わな
かった。こう考えると、「あの橋を渡っ
ても、イマジネーションの世界へと強
烈に子どもたちを誘う題名だったので
ある。

る。低学年の間はイマジネーションの
世界に生きている。つまり、イマジネー
ションの世界が分母となり、現実界は
分子となる。しかし、中学年からは、
徐々にそれが逆転しはじめる。分母が
現実意識となつていき、分子にイマジ
ネーションの世界をとるようになって
くるといふ考え方である。

⑩ (三年男 聖徳)

(これはあくまでも、空想なので信じ
ないで下さい)

あの橋を渡るようになったのは、昨
日の事なのです。今回の事を、これを読
んでいる、あなたに話してあげましょ
う。

私は三年生になったばかりです。

私は三時四十分くらいに学校から
帰つてくると、いつもピアノの音が私
の耳にとびこんでくるのです。それは
いつもあの橋から聞こえてくるので
す。あの橋は、昼でも暗く、となりの町
までつながっているとても長いのです。
あの橋を通る人はあまりいません。そ
れにトンネルになっているのです。そ
の橋からピアノの音がいつもきこえて
くるのです。私は友達をよんで、あの
橋を渡ってみよう、と思いました。友
だちはみんなさんせいし、友達みんな
と一緒に橋に入っていました。すると
後ろで、ボタンという音がきこえま
した。

なんとトンネルの入口がなくなつて
いたのです。みんなは、

「ギャ……………」

といいました。こわさのあまり足が
すくんでしまいました。それでも、みん
なは前へ進んでいきました。そうした
ら、ピアノがおいでありました。みんな
が見ていると、ピアノがひとりで、な
り出しました。その曲は「月光の曲」で
した。

みんな走り出しました。

私をとりのこして……。

「ギャ……………」

「うっ、ぬっ。」

私はベットにいました。

「そうか。夢だったのか。よかった。」

と、その時、ピアノの音がきこえてき
ました。

「ギャ……………」

それはお母さんのひいていた曲でし
た。

空想である。ゆめだった。とことわり
を入れて書かれている。しかも、そのま
まいマジネーションを書きつけるので
はなく、人にきかせる構えを取ってい
ることも、自分自身が主体となつてき
ている証拠である。

⑪ (三年女 聖徳)

ある日、いい天気の日、お花畑の中
の木で、できている橋の前に立つてい
ました。橋のむこうには、ゆうえん地が
見えました。私はその木の橋を渡ろう
としました。すると、花がクルクル回
りなが空中にういてゆつくり橋の上に落
ちました。その花を、とびこえながらわ
たるとゆうえん地につきました。また
橋があつたけど、こんどは、てつでき
ていました。また橋渡ろうとすると、く
まの人形が橋のむこう側を指さして、
「おわたり下さい。」といいました。私
は、ゆつくりわたっていくと、こんどは
自分のベットにすわっていました。
「なーんだ。ゆめか。ははははは。」で
も、本当はゆめか、ちゃんとあつたの
か、一瞬わからなくなりました。

白昼夢であったか、わからなくなつたと、ことわつていところが、夢が現実かにこだわっている点だと考へる。

⑫ (3年女 小川)

色々な橋がある。どこかの橋をわたればめいろの国へ、遊園地へ、自分のみらいへ行ける。

一番右の橋をわたつた。……めいろの国だ。こんなめいろ、頭がいたくなる。右へ、左へ……ゴールだ。この橋を渡ればゴール。橋をわたつたとき、まぶしい光がこつちを向いて

「おいで」

と言つてるような……。あ、あれはまぼろしのしずく……。自分で道を決めることができた。あの橋をわたつて……。

最後に「あの橋をわたつて。」と一言つけていところは完全に、自分主体である。橋をわたつていったところは異界であり、自分は、その中で迷路の道を決定できたといつているのである。しかし、まぶしい光があらわれているところはイメージにリードされているのである。

(2) あの世の世界とこの世の世界の命名

次の2つの作文は単にあの世の国の

名を言っているのではなく、命名して対象化している。

⑬ (3年女 小川)

にじのむこうには空の世界があつて、おくには星の橋がある。星の橋をわたると、夜空の世界が広がつていて、お月様もいる。お月さまのうしろに、魚の橋がある。

そこは海の世界があつた。いろんな魚が、泳いでいる。おくの方に、ふつうの橋がある。わたると……人間の世界にもどつた。

⑭ (4年男 聖徳)

長い橋のむこうは空に続いている。その先は、空の国だ。

その橋は、木でできているのでもなく、鉄でできているのでもない。雲でできているのだ。その橋をわたるのは、死んだ人と空にあこがれているほんの一部の人。そこに行つた人は、新しく生まれかわるか、空でくらす。そこでは、生命を生まれかわらせたりすることができる。しかし、そこに行くと、おぼんの日しか、自分の家、家族のところに帰れない。その橋は、天国に行く特別の橋だ。

⑬の作文は、にじ、くも、空など①の

一年生の作文と同じ要素であるのに、

対象化していて、躍動感が見られない。あの世とこの世を区別しはじめている。

⑭の作文となると、あの橋を天国に

行く特別な橋と銘を打っている。そして、その上にたち、空の国を紹介している。

3 世界定め (高五・六年生) — イマジネーションの時間・空間をこえて —

中学年では、現実の世界とあの世の世界とを区別し始めてきている。イマジネーションに引きずられつつも、これは空想なんだとことわり、文章を始めたたり終了したりしている。高学年になると、このイマジネーションの世界に入つている自分をもう一歩離れたところから見る自分が自覚できるようになつてきている。これを私達は「世界定め」と呼んでいるが、本会会員葛西琢也氏は「トランスフォーメーションの獲得」(注4)で「世界定め」の事例を報告している。上原輝男氏は、世界定めについて、「自分の意識が世の中を作つてい

る。イメージの時間・空間・人間(ジンカン)によって、どんな世界が思い描けるようになってい

るか。世界定めがなかったら何もできない。世界定めにより、俳句や歌ができるのである。知覚は、即ち世界。体験しないものさえも世界を作つていくことができる。」(注5) 時空の転換のイマジネーションにより、トランスフォーメーションが発動し、

その子自身の意識の世界が定められてくるということを述べている。

この世界定めがなされている作文を、あげていきたいと思います。

(1) 無限とじつじつ

他学年では出なかつた作文が、六年生に二編登場している。それは時間が意識されているということである。他の学年でも、「時の橋。あの橋を渡れば、未来でも、過去でも行ける橋。」(3年男小川小)とか、「ある日、その橋を渡るとなんといつもの道ではなくて、花畑になつています。花々たちと遊んでいると、もう学校から帰ってくる時間になつています。自分では、五、六分、いや、二、三分しか遊んでいないような気がするのに……」(5年男聖徳) 3年生のように時そのものを断片的に意識するものや、5年生のように現世の数時間

間が、あの世の数分となる現世とあの

世の時の流れの違いに時を意識するものはいくつかあったが、次の二編のように、無限を意識したものは、なかった。

⑮ (6年女 聖徳)

橋のむこうには、大きな門がある。その門は木で囲まれていて、その奥にはふつうの公園よりちよつと大きいかなっていうくらいの庭がある。中心には、近くに行つたら、すずしくて気持ち良さそうな噴水がある。さらに奥には、そこらへんにある大きな木より高いと言えくらゐの家がある。私はふと思った。

まるで日本にはいないくらいの億万長者の家だ。私も、あそこに行つてみたい。

そう思った瞬間、今自分が渡ろうと思つた橋が、ギシギシと音を出しはじめたのだ。ちよつと待つて。私もあつちに行きたいんだけど、今にも落ちそうな橋になつちゃう。渡れない。でも他には橋が無いし、もし渡つてしまつたら、絶対に落ちてしまう。

私はあきらめました。どうせ私は、あんな億万長者の家には、住めないし、ましてや行くこともできない世界だから……。

そんなことを思つていながらも、私は、いつまでもいつまでも橋のむこう

にある、大きくてきれいな家を見ていました。

⑮の作文は、前半は低学年のあこがれと思えるような橋の向うへのあこがれが書かれているが、橋がくずれて行けないのである。

そして、そのあこがれがたちきれず、いつまでも見守る自分がいる。永遠に向うへ行けない自分を見ている。

⑯ (6年女 聖徳)

ここは夢の中。なぜか一本の橋があつて、むこうは霧でよく見えない。一体、なにがあるの？ 私は好奇心に満ちてきて、橋を渡ろうとした。

一歩……。一歩ふみこんだ瞬間……あたり一面霧が晴れた。

むこうには、……おかしな家があつた。なんか、くだらない……とは言えど、やっぱり行つてみたい。

そこで、気を取り直して、進み始めた。私は走つた。がんばつた。思いっきり走つてみた。

……あれ？ けつこう進んだのに、まだ先が長い。しかも、むこうまで着く距離が二倍ぐらいにふえているではないか。私はおかしいと思いつつ、また全速力で走つた。もうそろそろつかれてきた。

私はとまってみた。おかしい……。私

は目的地点になかなか着かない。いくら走つても、どんなに速く走つても、いつまでも、いつまでも、続いていく橋。もう私は目的地点へ行けないのだろうか。……そう、この私の夢の中の橋は、「行けずの橋」(さんずの川のまね)だったのだ。自分がどれだけ進んでも、その分橋がのびてきて、一生、むこうへは行けない橋だったのだ。

⑯の場合は、橋が伸びることで、永遠に行けない向うの世界を見ている。二つの世界あの世とこの世をつなぐ橋が、片方では伸びはじめる。そして、それ故永遠に行けないあの世を感じ取っている。他学年では、空間移動が多く、地点から地点への転換であつた。

しかし、六年生では、ことばとして無限ということばはあてはめてはいないが、時間の流れを、あの世とこの世につけてみると考えて良いのではないか。あの世とこの世を空間として、位置づけるだけでなく時間軸をもつて、尺度として見ているというところに、ひとつの世界定めをしているのではないか。

(2) トランスフォーマー ションによるあの世とこの世の自覚

⑰ (5年男 聖徳)

「私の名前は三男です。老すいで死んで今よく分らない所にいます。ある日孫とゲームをして、負けて散歩をしていたら、へんなUFOがやってきて、ネコをさらつてしまいました。そして、昼寝をしたら、そのまま永遠に眠ってしまいました。そこで、ここにいるのです。あ、あそここの川の上に平均台みたいな橋がかかっている。いつてみよう。」
そして、三男はわたりました。そしてらひげの生えた偉そうな人と、丸に羽がはえたような生き物が2匹飛んできました。そして、ひげを生やした偉そうな人が、
「私は神じゃ。お前の名は何んと申す。」
「は、三男と申します。」
「死亡の予定がきている。この生き物についていけ。」

フイーン。そして、三男は天国で永遠に楽しんでます。

⑰は、「あの橋をわたつて」という題名から、死んでしまう人間がイメージされ、その世界に入り込み、あの世へ

行ったものの言葉から文章が始まっている。そして、死んでしまった人を見ている自分が感じられる。

⑩ (6年女 聖徳)

虹の橋。それは、雨のやんだ日にしか現れない。それも、たまにしか……。一度でいいから、あの橋を渡りたい。どこへ行けるのだろうか。となり町、外国、それとも宇宙だろうか。そこで私は想像してみた。あの橋を渡ったら、どうなるか……。

雨のやんだ日に、虹が出た。私は、虹の足まで歩いていく。ようやく着いた。あたり一面七色のじゅうたん。ゆっくり一歩二歩、歩いたり、走ったりした。上へ行くと辺りは真っ白でふわふわのわたあめ。ちよつとかじつてみると甘くておいしい。きれいな太陽で眠たくなって眠ってしまう。また起きて、七色のじゅうたんをかけ足で走りおろる。

すると、そこは現実ではない空想の世界。

お菓子の家がある。花も木も草もしゃべっている。

ちよつと歩けば、山も海もある。動物たちもおどっている。そして、私はふと、家に帰りたくなった。また虹の橋を渡って……。虹の足から虹の足へ歩く。本当に気持ちいい世界だった。

本当に私の考えている通りだったら、

虹の橋は、現実の世界と空想の世界を結ぶ橋なのだ。

おそらく、虹は現実には存在し、空想を思わせてしまうからだろう。どちらにしろ、虹の橋は私にとって、空想への橋なのだ。

⑩のこの作文は、自分自身のイメージの発動性を冷静に分析している。「あの橋をわたって」から、トランスフォーメーションをおこし、虹の橋に至り、トランスフォーメーションをおこしうるものとしての虹の橋を確かに自覚して書いている。特に最後の一文「虹の橋は私にとっての空想への橋なのだ」が、それを如実に語っている。イメージネーションへの世界に入り、そこで体感する気持ちの良い世界を見つめているもうひとりの自分がいて、世界定めをしているのである。

(3) 神性と野性をよびおこす イメージネーションの世界

最後に示すこの六年生の二編は、本誌十六号のねらいとする、子どもの神性、野性が、イメージネーションの発動により、かいま見ることができるということを証明する、ものだと考える。

⑪ (6年男 聖徳)

ぼくはなぜここにいるんだろう。目の前には大きな川と橋があり、また足元は石だらけであった。その時、背骨にすごい痛みが走った。

ぼくは高校三年生。もうすぐ大学入試が始まる。そのため学校に行かない日も此の頃出てきた。

そんなある日の事だった。ぼくは試験会場へ向かっていた時、いきなり背中になにかがぶつかった。それは大きなトラックだった。ぼくは赤く染まった左手を見ながら意識を失っていった。ぼくはなぜここにいるんだろう……。

目の前に大きな川と橋があり、また足元は石だらけであった。

その時、背骨にすごい痛みが走った。そういえばさつき大きなトラックにはねられたのだ、

と思った。そのうち痛みも和らいできた頃、どこからか声が聞こえた。

「前にある橋を渡りなさい」

と言っていた。その後山びこのようになり返し聞こえた。渡ったら何かあるのだろうかという興味と何がおきるのだろうかという恐怖が混じった。その時、前から大きなヘビというかミミズというかがはってきた。しかも所々傷ついている。そして言った。

「はやく反対の方向に走っていかないと、この私のようになりますよ」と言って死んでしまった。ぼくは声のする方と反対の方へ走っていった。後ろから

「渡れ、渡れ……。」

と声が聞こえたができる限りの力をだして走り続けた。そして疲れて倒れた時に光が見えた。

気づいてみたらそこは真白い病院であった。ぼくはあの後病院に運ばれたらしい。院長の説明によると脳死と判定された後になぜか、走った後のあの「ゼーゼー」という息がかすかに感じられたので、応急処置をしたとの事だった。そして、一つ質問された。それは「死んだ後に何か見えたかい。」

「死んだ後に何か見えたかい。」という事だった。ぼくは少し迷って答えた。

「いいえ、なにも見えませんでした。」

理由は一つ。ぼくの心の中にだけにこの世界は存在させておこう、と思っただからだ。どんな怖い人がどんな武器を持ってきても、だ。

⑪の作文、これを上原輝男氏は、かいまみの世界といった。「透かして見たとき、ちらりと見える。これが、かいまみであり、別次元が確定する。ほんの一瞬间しか見えない。深層を見たというの

もそれ。イメージとして残るのが、これだと思ふのです。」(注6)「この世とは異なつた時間をちらりと見た何の瞬間を見る。かというと、神の姿をちらりとみるじつと見なくなつていい。いいというより、じつと見てはおれないのである。」(注7)

上原輝男氏のいう「日本特有の素晴らしい世界定めである。」かいまみの世界を、この子は見たと書きつけている。このかいまみの世界が見えていゝといふことこそ、子どもの神性の顕現といえるのではないか。

⑳ (六年女 聖徳)

ぼくの周りに白い霧がたちこめていた。周りがまつたくみえず、聞こえる音は……、水の流れる音、それに、犬の鳴き声だった。ぼくは、その鳴き声に聞き覚えがあつた。

ぼくの、昔飼つていた犬のものだった……。

その日、空は雲一つない日本晴れだった。晴れわたつた空は、ぼくにはいいことがおこる前兆のように見えた。

「望菜、ちよつとここにおいで。」
母さんがぼくを呼んだ。

「なに、母さん。」

ぼくは母さんの前に座つた。ぼくはまさか母さんがそんなことを言い出すと

は思つていなかった。

「いい、望菜。このことを聞いて、ショックは受けないでね。」

母さんがそう言つた時、ぼくの心の黒い影が走り去つた。晴れわたつた青い空を黒雲が走り去るようになつた。

「今日、武山さんという方が家にいらしゃるわ。」

「なにをしに？」

ぼくはきいた。

「火扇を……、引きとりにいらしゃるの。家は、もうそろそろ赤ちゃんが産まれてくるでしょ。だからもう火扇の面倒が見れなくなるの。」

「そんなつ、イヤだ。絶対にイヤだ。」

「わがまま言つてもだめ。もう決まつたことなの。それに火扇もその方が幸せよ。」

ぼくはショックだった。受けるななんて言われても無理な話だった。火扇は、ぼくの兄弟のような犬だった。そんな火扇を新しい弟が出来るから、どこかへやつてしまふなんてとても耐えられなかつた。ぼくの心の中が一気に影におおわれた。そして、外では、ちよつど雨が降り出したのだつた。

「火扇をどこかへやらないで、赤ちゃんをどこかへやつてしまえばいいじゃないか。」

ぼくは2階へかけあがつた。

「望菜、待ちなさい。」

母さんの声が聞こえてきた。でも、ぼくは、大きな音をたてて部屋に入つた。そして、声を殺して……泣いた。

その日、本当に火扇は連れていかれた。火扇は大きな悲しそうな声で鳴いていた。でもぼくは会いにいかなくつた。会つてしまつたらもう離れられなくなるのがわかつていたのだ。

霧がぼくの周りから消えていった。そして、ぼくの目の前にあつたのは、赤い橋だった。だれもない、その橋に足を一歩踏みだしたとたん、周りの景色がすべて消え去つた。

ぼくは自分の部屋にいた。日がさしていた。一日の始まり。またつまらない一日が始まるのだ。だが、カレンダーを見たとたん、ぼくの心からそんな気持ちちは消え去つた。今日はあの日からちよつど三年目だったのだ。ぼくは思った。今日という日に夢の中で霧につつまれて聞いたあの声。そして、目の前に現れたあの赤い橋。ぼくは思った。今日こそ火扇を見つめることができる日だと……。そして、あの赤い橋がそのヒントになるといふことを。

ぼくはその日中、あの赤い橋のありかを調べ続けた。そして、その日の夜、もうあきらめかけていた時、ぼくはある本の中にあの橋を見つけた。橋のありかがわかつた。そう思ったとたん、ぼ

くのころからはい色の雲が消え、まつ青にすみわたつた。ぼくは安どのためにベットにたおれこんだ。

気がつくと、ぼくは家の庭につながれていた。そして、ぼくの体は人間のほくのものではなく、犬の、火扇のものであつた。ぼくは火扇になつてしまつたようだった。ぼくが気付いたその時、家に訪問者が現れた。若い男の人とぼくとおなじ年ぐらいの女の子だった。その人たちがベルを押すと、母さんが走つていった。そして、こんな言葉を発したのだった。

「いらつしゃい。武山さん。」

ぼくは心臓が止まるかと思つた。武山さんつて……火扇を連れていくんだ。

「あの、こんにちは。早速なんですけど、あの犬はどこに……。」

「ああ、庭につないでありますよ。」

そんな会話がきこえてきた。そして男の人と女の子がこつちへ歩いてきた。でもぼくははい抗しなかつた。何をやつても無だたとわかつていたからだ。

「おとなしいですね。でも、本当にいいんですか。」

男の人が聞いた。
「どうぞ。」

母さんは何のためらいもなく、ぼくの手綱を女の子にわたした。女の子はうれしそうにぼくにほおずりをした。ぼ

くはその時ふと思った。この女の子のように、ぼくも火扇と出会った時はおもしろいほおずりをしていた。

火扇は多くの人に喜びを与えるために生まれきたんじゃないかと。

ぼくは男の人と女の子といっしょに門を出た。そして、人間のぼくに向かって鳴いた。長く遠吠えのように。

ぼくは目を覚ました。朝だ。火扇に会いに行こう。そう思った時にぼくはふと思った。会いに行つていいの。女の子が悲しまないか。でも、ぼくは会いに行きたいという気持ちが押さえられなかった。だいじようぶ。ぼくは火扇を連れにいくのではないんだ。ぼくはそう思い、明るいうちに出ていった。

この橋だ、まちがいない。ぼくはあの赤い橋の前に立っていた。ぼくはドキドキしながら赤い橋をわたっていった。それと同時に、空に、雲がどんどん出てきた。ぼくは武山という名字の家を捜した。あった、武山さんはここにいる。火扇も……。ぼくは武山さんという名字の家の前に立った。ぼくは息を深く吸いこみ、チャイムを押しした。

「はい。」

女の子の声があった。そして、門を開けたのはあの女の子だった。

「あ、あの、火扇に会わせてください。」

ぼくは勇気をふりしほつて言った。女の子は息を飲んだ。

「あなた、火扇の前の飼い主なの？」
女の子が言った。ぼくは首を縦にふつた。

「いいわ。連れて来て。」

女の子が言った。

ぼくの目にあの火扇が写った。その瞬間、ぼくは足を止めた。火扇がぼくのことを忘れていたら……。まさかそんなことはないと思つたけど、火扇がぼくを無視する姿が目の裏に浮かんで消えていった。その時、ぼくは自分が火扇と対面する自信がないということを感じた。ぼくは女の子に言った。

「あの、ごめんさい。やっぱり、ぼくは火扇に会えない。」

その時女の子がぼくに向かってどなった。

「あんた。それでも火扇の飼い主？」

三年間も会いにこないで、やつと会いに来たと思つたら、まだ会えないだなんてどういうつもり？ あんた、火扇の気持ち、考えたことあるの？」

ぼくはドキッとした。ぼくは今まで一度も火扇の気持ちになつて考えたことはなかった。

「火扇は、あなたに会いたくて、でも、それを我慢して三年間過ごして来たのよ。」

女の子の言葉を聞いたとたん、ぼくは

涙があふれてくるのを感じた。火扇にお礼を言いたいという気持ちで心の中がいっぱいだった。

「さあ。火扇に会いに行つてあげて。」
女の子はそう言うと、ぼくを前に押し出した。

ぼくの目の前には火扇がいた。火扇は後を向いて、ほんやりしていた。ぼくはおそろおそろ火扇に声をかけた。火扇はのろのろとこつちを向いた。しかし、ぼくと目が合ったとたん、火扇の顔にはおどろきの表情が現れた。そして、その表情がだんだんうれしさに変わっていった。そして、火扇はぼくに飛びついてきた。ぼくも火扇をしっかりと抱きしめた。

「ありがとう、火扇。三年間も待たせて、本当にごめんよ。」

ぼくがそう言うと、火扇がそれに答えるように鳴いた。そして、火扇のすんだ青空のような目に涙が浮かんだ。ぼくもなぜだかわからないけど、涙がほおを転がっていった。その涙に浄化されるかのように空の雲も少しづつ消えていった。

その後、ぼくは女の子にお礼を言い、火扇と別れた。また会いにくると約束をして。ぼくは橋を渡りはじめた。そして、こう思った。ぼくにこの橋は恩人であり、神様だったんだ。この橋のおかげで火扇に会うことができたんだもの、と。

それから三年後、ぼくは朝、目覚ましの音に起こされた。そして、いつもと同じつまらない日をおくろう、とはしなかった。ぼくは出かける用意をした。まぶしい朝日を浴びながら、ぼくは歩いていった。火扇に会いに。そして、あの赤い橋に会つて、お礼を言いに。

⑳の作文についてはあの世とかこの世とかというのではなく、イマジネーションの時間、空間に於いてすべて自由自在である。文の構成自体、トランスフォーメーションの連続である。橋から出発して、イマジネーションにぐいぐい引っぱられていく。予兆、霧、そしてひきがねになるのが題名の赤い橋なのである。そこだけ色付いている赤い橋なのである。その赤い橋が、暗示の証拠のように、「赤い橋は神様であった。」と主人公に語らせている。暗示や予兆の源にはこのような人間の力以上のものを感じる心が存在するのではないか。それを感じ取る心を持つ人に対し、神性が宿っていると人は言うのではないか。イマジネーションによって人の行動が決まっていくということがよくわかり、イマジネーションにゆだねられた夢の世界を生きている子どもがよく見えた。

子どもの境界領域として、橋のむこ

うに、ほとんどの子どもが、あの世を設定していることに感動した。十四号で夢の構造分析を試みたときよりも、スケールのには小さいものであったが、橋と限定することで、子どもたちの「あの世」に焦点があつたといえよう。

子どもたちに「あの世」という題名で書いてもらったら、こんなに「あの世」を書きつけてはくれなかつたと考える。橋というトランスフォーメーションをおこすものだからこそ、「あの世」を語ってくれたのだと考える。

冒頭の部分で上原輝男氏のイマジネーションの定義を問題とした。「見言態流の捉え方を明確にしておかなければならない。それは、『この世とあの世のつながりそのもの』ではなく、『この世の人間がなぜあの世を語るのか?』『あの世ということに反発するタイプの人間は、どうして反発したくなるのか?』という動きを問題にしているんです。」という言葉である。すなわち、イマジネーションを語るということが、あの世を語ることなのである。そして、あの世を語ることが、子どものもつ神性・野性のあらわれであると考え、私たちはそのイマジネーションの発動性の根源に、子どもの神性と野性を見て取っているのではないか。だからこそ、「あの世」ということに反発するタ

イブの人間が、存在してくるといふことなのだと思う。無視ではなく、否定ではなく反発なのである。反発とは、自身の押さえきれない感情が、潜むからなのではないか。「この世に生死のある限り、人は、この世の中にあの世を住まわせている。」また、「子どもに対し、大人が『はっ』とするのは、子どもたちの神性と野性に驚くわけなんです。」という上原輝男氏の言葉(注8)どおり、子どもたちは、あの世を樂しげに語ってくれた。

一、二年生で、あこがれが大きく、ふくらみ、三、四年生では、ややしほみ、五、六年生では、再び復活するあこがれはやや偏向性を帯びてくる。しかし、小さくはなつても、決してなくつてはおらず、心の中に奥深く潜んでいる。そして最後の六年生の二編は、子どもが、神性と野性を奥に潜ませ、これほど自由に、そのイマジネーションの中に生きていくのか、ということを感じさせてくれるものであり、改めて、子どもの素晴らしさを確認させられた思いである。

(町田・小川小・教諭)

■注

- 注1 坪田譲治作「善太と三平」
- 注2 児童の言語生態研究第十四号「子どもの『夢』の世界構造」武

村昌於

注3 児童の言語生態研究第十四号

「個性と夢」上原輝男

注4 児童の言語生態研究第十五号

「トランスフォーメーションの獲得」葛西琢也

注5・注8 上原語録(宮田雅智・作成)

注6 上原輝男 最終講義「かいまみの世界」

注7 「かぶき十話」上原輝男著(主婦の友社)

◎「あの橋をわたって」作文協力校

一年生 聖徳学園 (五十五名)

二年生 学習院 (三十八名)

聖徳学園 (二十八名)

玉川学園 (三十二名)

八王子山田小 (二十九名)

(計 百二十七名)

三年生 聖徳学園 (五十五名)

町田四小 (四十三名)

町田小川小 (三十一名)

(計 百二十九名)

四年生 聖徳学園 (二十四名)

町田四小 (二十九名)

(計 五十三名)

五年生 聖徳学園 (五十七名)

六年生 聖徳学園 (四十四名)

